

特集

序 次世代のリハビリテーション治療戦略

尾川 貴洋*

リハビリテーション医療は、いま大きな転換期を迎えている。超高齢社会の進展、疾病構造の複雑化、急性期医療の高度化、さらには患者の生活背景や価値観の多様化に伴い、従来の画一的な対応のみでは十分に応えられない時代となった。今日求められているのは、障害された機能の回復を目指すにとどまらず、疾患の特性、全身状態、生活機能、社会参加までを一体として捉えながら、個々の患者に最適化された治療を構想し実践することである。すなわち、リハビリテーション医療は、単なる訓練の提供ではなく、全身を診る視点に基づいて治療を設計する総合的な戦略医療として、あらためてその本質が問われている。

このような状況のなかで重要となるのが、局所ではなく全体を診る、いわば Whole Body の視点である。運動機能の障害は、決して運動器のみの問題として完結しない。呼吸、循環、代謝、神経、骨格筋、栄養、嚥下、認知、精神心理的背景など、多様な要素が相互に影響し合うなかで、患者の機能は成立している。したがって、リハビリテーション治療戦略とは、障害部位に対する個別的介入の集積ではなく、全身の状態を統

合的に把握し、その患者においていかなる運動適応(全身評価に基づく最適な運動介入条件)が成立し得るのかを見極めながら、最適な介入を構築する営みでなければならない。近年、リハビリテーション医療を取り巻く環境は大きく変化している。急性期においては、重症患者に対しても早期からの介入が求められ、内部障害や重複障害を有する症例に対しても、より精緻な全身管理のもとで治療戦略を立案する必要がある。また、神経筋疾患、脳血管障害、脊髄損傷、運動器疾患、骨軟部腫瘍、摂食嚥下障害など、対象領域は拡大の一途をたどっている。加えて、ロボット技術、工学的支援、デジタルデバイス、定量的評価技術の進歩は、評価と介入の精度を高め、従来の経験則に依存しがちであった領域に、新たな客観性と再現性をもたらしつつある。

しかしながら、次世代性とは単に新しい技術を導入することではない。真に問われるべきは、それらをいかなる思想のもとに位置づけ、どのような治療戦略として患者に還元するかである。どの時期に、どの病態に対し、どの程度の介入を、いかなる目標設定のもとで行うのか。さらに、それを安全性、多職種連携、生活再建、予後の視点まで含めてどのように編成するのか。こうした一連の構想力こそが、次世代のリハビリテーション医療において最も重要な要素であると考えられる。

本特集「次世代のリハビリテーション治療戦略」は、このような問題意識のもとに企画された

—Key words—
次世代リハビリテーション医療、Whole Body、全身評価、運動適応

* Takahiro Ogawa：愛知医科大学医学部リハビリテーション医学講座 教授

ものである。急性期における治療戦略をはじめ、神経筋疾患、運動器疾患、脳血管障害、骨軟部腫瘍疾患、内部障害、ニューロリハビリテーション、脊髄損傷、ロボットリハビリテーション、摂食嚥下、回復期といった、現代リハビリテーション医療を構成する主要な領域について、それぞれ第一線で診療・研究・教育に携わっておられる先生方にご執筆いただいた。各稿は、個別領域の最新知見を示すのみならず、それぞれの疾患や障害に対して、どのように治療戦略を立てるべきかという視点から論じられており、本特集の主題にふさわしい内容となっている。

本特集を通覧すると、対象疾患や方法論は異なっても、その底流には共通した理念があることがわかる。それは、患者を部分ではなく全体として捉えることであり、障害を静的な結果としてではなく、全身状態と生活機能の動的な相互作用として理解することである。脳血管障害を診る際にも呼吸循環や栄養状態を無視することはできず、内部障害を診る際にも運動器機能や活動性の評価は欠かせない。摂食嚥下障害においても、局所機能のみならず、姿勢、覚醒、呼吸、栄養、全身耐容能が密接に関与する。専門性の深化は重要であるが、それを真に臨床の力へと変えるのは、全身を診る統合的な視点にほかならない。また、治療効果の評価についても、次世代の視点が求められる。筋力や関節可動域、歩行速度、嚥下機能などの改善は重要な指標で

ある一方、それらのみをもって十分とは言い難い。患者がどれだけ活動性を取り戻したか、生活をどのように再構築できたか、社会参加にどのような変化をもたらしたか、さらには合併症予防や再入院抑制にどのように寄与したかといった、より包括的で本質的な成果を見据える必要がある。リハビリテーション医療は、機能の回復を支える医学であると同時に、人生の再構築を支える医学であるべきだからである。

本特集が、読者諸氏にとって各領域の最新動向を理解する一助となるのみならず、日常診療における治療戦略をあらためて見つめ直し、自施設、自領域における実践をより高い次元へ導く契機となれば幸いである。リハビリテーション医療が、疾患を診る医学であると同時に人を診る医学として、さらに成熟し発展していくことを期待したい。末筆ながら、ご多忙のなか本特集の趣旨にご賛同くださり、貴重なご寄稿を賜った執筆者の先生方に、編集者として心より御礼申し上げます。また、本特集の企画・編集にあたりご尽力いただいた関係各位にも、深甚なる感謝を表したい。本特集が、次世代のリハビリテーション医療を考えるうえで、ささやかながらも有意義な一助となることを願っている。

利益相反

本論文に関して、筆者に開示すべき利益相反はない。